

(第3種郵便物認可)

# サイ・テック 知と技の発信 こころむ

【536】

## 埼玉大学・理工学研究の現場

深層学習が人間の認識能力を超える性能を発揮したことで脚光を浴びた人工知能(AI)は、現在あらゆる場所で用いられるようになってきました。グーグル社等によりAI技術を用いたさまざまなウェブサービスが展開され、目に触れる形で一般的にAI技術に触れ合えるようになりました。

たとえば翻訳サービスでは、深層学習により高度化した音声認識、翻訳、音声合成技術により、声で入力すると翻訳された声がスピーカから流れ、スマートフォンさえあればごく気軽に多言語コミュニケーションを行うことができるようになりました。20年前にSF作品で夢とともに語られた技術が、もはや手中に収まっているので

す。そのよつにAI技術が一般化されていく一方で、依然AIは万全に活用されているとは言えない現状もあります。その最たる例は自動走行技術です。自動走行技術は100年も前から研究が行われてきており、またAI技術の発展に伴い街中の走行が技術的に可能なレベルまで進歩していますが、残念ながらまだ自動走行車両は街中で見かけられません。その理由はいくつか挙げられますが、最も

大きい問題は責任の所在といえます。自動走行車両が事故を起こした場合、AI自身は責任を取ることができません。所有者、開発者、管理者の誰かが責任を負うべきで、具体的に誰が...という規範・

# 人とAIにやさしい社会

## 鈴木亮太 助教



すぎき・りょうた 2016年埼玉大学博士(工学)取得。16〜21年産業技術総合研究所。22年から現職。画像処理・ロボット・AI技術を用いたヒューマンコンピュータインタラクションの研究に従事。

判例作りが行われている状況ですが、その進捗は遅々としているように感じられます。

AIの社会進出においては、そのような法的な視点での議論が主流となっていますが、私は別の方向からAIの社会進出における障害の解消に取り組んでいます。それは、AIの気持ちを人が理解できるようにできるようにする、AIの透明化です。自動走行車両が、人が日常的に行うような自然な目配りや身ぶり手ぶりによつて進行方向を周りに伝える方法があれば、対人の衝突事故を劇的に減らすことができると考えています。また、AIがどこに注目しやすいかを仮想現実(VR)技術により没入的に見える化することによ

り、感覚的にAIの気持ちを体感することができるようなデバイスの開発を目指しています。人は人と相対するとき、相手が間違つた行動を取る割合やその時の対応を無意識的に見積もる合理化を行つており、それにより円滑なコミュニケーションを実現しています。一方、AIに対しては厳格な対応を求めてしまいがちで、100%正確なら使つ、そうでなければ一切信用しない。もし人がAIの気持ちを理解する感覚を持てるのであれば、同様の合理化による効果的なAIとのコミュニケーションを行うことができるようになり、人とAIがお互いの機能を極限的に引き出し、高め合つ共進化を果たせると考えています。